

意宇川の待雪草物語

文・イラスト
原 美代子

弘子の背負い籠に、枝木を入れてくれながら、優しい笑みを見せてくれました。

「困った時には、訪ねておいで」

雪の中にぼつと明かりを灯すように咲く待雪草は、雪の精ともいいます。

昭和二十年冬。

弘子は、松江市の郊外にある、八雲という村で暮らしています。父は太平洋戦争で戦死し、家族が住んでいた町は焼夷弾で焼け野原になってしまった。

親戚の叔母に引き取られ、八雲の村に来ましたが、いつも働かされ、苛められるばかりです。

「山羊や鶏に餌をやって、それから、意宇川近くの山に行つてな、竈で焚く枝木を拾つておいで」叔母はそう言って、町へ出掛けました。



弘子は、野良ではよく働き、手際よく家事もし、家畜も可愛がる心優しい十八歳の娘です。

星上山が、白くおおわれています。寒さに震えながら意宇川の畔で枝木を集めています。

「よく働くね、大変だろ。でもいつか、きっといいことがあるさ」

遠く山並みが続く空に流れる雲を、目で追いかがらいました。

「焚き火をしているんだ。暖まるといいよ。僕は、佳夫っていうんだ」

「そうなの……」

「戦争で負傷して足が不自由でね、八雲に帰つて来たんだが……。独りぼっちさ」

（独りぼっち……）

「同じねと、弘子は小さく呟きました。遅くなると叱られるだろ。僕が伐つた枝を持つて行つていよいよ」

不思議なことに、佳夫の周りに雪はありません。

次日も、相変わらず雪が降つていました。日吉の切り通しから流れ落ちる水飛沫の向こうに、佳夫が画板に向かって絵筆を動かしていました。

（佳夫）

弘子が被つている防空頭巾もフエルトのマントも、たちまち真っ白になりました。

「ほんの雪が降つてきました。八雲の村も森も、冬は深い雪に閉ざされるのです。いつしか吹雪になりました。弘子が被つている防空頭巾もフエルトのマントも、たちまち真っ白になりました。

「ああ、伝言板のこと？ 僕が書いたんだ」

一本の待雪草を雪の中から引き抜くと、弘子の手に握らせました。

顔を上げると、佳夫も画板も消えていました。

弘子は待雪草を袂に入れて家に帰り、叔母に渡しました。

「そんな大切な花…。あの……駅の」

「ああ、伝言板のこと？ 僕が書いたんだ」

一本の待雪草を雪の中から引き抜くと、弘子の手に握らせました。

突然、森の奥に住むという山の神が、白い衣を纏い、杖を手に、毛皮のマントと長靴を抱えて現れました。山の神が、佳夫の姿となつて現れたのです。

「伝言板の主は私です。森の精から知らせがあります。待雪草をありがとうございます。お礼です」

叔母は喜び、毛皮のマントと毛皮の長靴を身につけました。

不意に、佳夫が杖をひと振りました。

すると

瞬く間に叔母は見たこともないような醜い動物に変わつてしましました。

意宇川の流れは、いつもと変わらぬ愛の歌を静かに奏でています。

（※待雪草＝スノードロップ）



◇後記

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を確に発信していきます。

ご投稿はメール、アクセスでお願いいたします。

内容の幅広さに感銘

本紙に取り上げられる記事の内容を見ると、敗戦時の激動期を体験された方の、生々しい記述や、身近な「島根原発再稼働」問題の報告など、一般のマスコミが書かない事柄が掲載されていて、「なるほど」と納得する。

私は敗戦時、国民学校（小学校）の高学年。教室で「満蒙開拓団を希望する者は挙手をせよ」との指示があったのを思い出す。

社会が混乱する中、地元の工業高校に進む。卒業時、花形産業だった紡績会社には入れず、地元企業で木工旋盤作業に従事する。小林多喜二の小説『蟹工船』に似たような場面もあった。苦節10年、独学で国家試験第二級無線技術士の資格を取得して職場を離れる。この資格で1年余り、われた人たちを迎えるために、この花が植えられていました。



昭和38年、島根大学教育学部の工学系教室職員として採用される。教員は所属教員の会計管理などが主な任務。私は他に電気実験と電気実習の補助、立案、教材開発、各種研究会発表と充実した30年間を過ごさせてもらひ、感謝している。

8年前、脳梗塞と脳梗塞で1週間、生死をさまよつた。このよう自分が生きてきた過去を振り返り、本紙の記事に共感することが多い。また、目の前の社会事象に、どう対処すべきかの問い合わせが、記事に表れているように思う。

願わくば、「神庭（かんば）の郷」周辺の探訪ツアーワークを企画してもらうと、それに参加したいと思つてゐる。

古川明信（松江市 83歳）